市民版

飾り樽すっきり収蔵

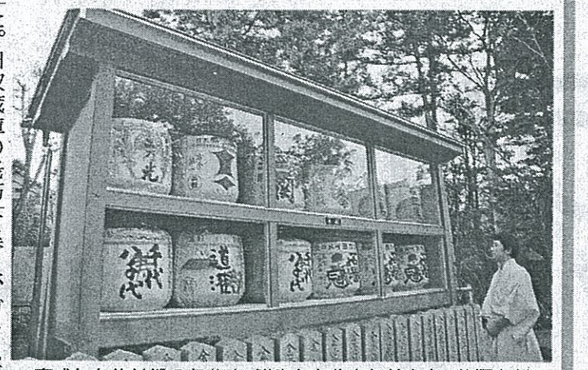
車折神社　ガラス張りで建て替え

京都市右京区の車折神社にこのほど、飾り樽用の収蔵庫が完成した。旧収蔵庫の老朽化に伴って、参拝者が見やすい場所に建て替え、ガラス張りにした。高田亘宮司(65)は「立派なものができた」と喜んでいる。

収蔵庫は大阪市の住宅販売会社数社が寄進し、参道沿いに設けた。

ヒノキ造りの朱塗りで、高さ2・7㍍、横4・4㍍。知り合いの酒蔵から奉納された樽を展示している。旧収蔵庫は昭和40年代に建てられ、傷みが目立っていた。

高田宮司は「たくさんの方々の支えがあって神社も成り立っており、美しいお披露目の場ができてよかった」と話していた。(山田修裕)



完成した飾り樽の収蔵庫。鮮やかな朱色に塗られ、参拝者が見やすくなった(京都市右京区・車折神社)

SL顔出す

梅小路で13車両

京都市下京区の梅小路蒸気機関車館で4日、蒸気機関車の先頭部分を車庫から出して展示する「頭出し展示」が始まった。13車両が頭を付き合わせるようにして並び、訪れる人の目を引いている。

蒸気機関車の迫力ある姿を楽しんでもらおうと、日頃は扇形の車庫に入っている蒸気機関車を3㍍ほど前進させて展示している。

大正時代に製造された車両もあり、日差しを浴びた車体の前で親子らが記念写真を撮るなどしていた。神奈川県から訪れた小学3年坪井駿太君(9)は「思っていたより車輪が大きかった」と話していた。

青空の下で迫力ある姿を見せる蒸気機関車(京都市下京区・梅小路蒸気機関車館)

新春企画として、蒸気機関車のすすで作った墨による書き初め体験を5日まで行っている。7日に「鉄道落語」の披露、8日には学芸員によるトークショーもある(いずれも午後1、4時から)。頭出し展示は9日まで。入館料が必要。(逸見祐介)

セレコーポレーション
マンションアパートの
空室
今すぐに借上げます!
0120-173-357
9:00～19:00(日・祝休)

地域報道部
☎075(241)6117
FAX 075(252)5454
読者応答室
☎075(241)5421

ほな、また、あした

「まちの縁側」から

③六原ハウス

(京都市東山区)

勢いよく回るこまが一つ、二つ、三つ。さびた鉄板の上に放たれた。「まだ載る。誰か続け」。日が差し、円い鉄板が特別な舞台のようにきらめいた。

昨年12月11日、住宅街の路地奥にある「六原ハウス」の庭は活気に満ちた。京都造形芸術大(京都市左京区)の学生グループ「まか通」が開いた交流イベント第2弾。住民が普段着で訪れ、餅をつき、丸めて食べる。受付帳には40人ほどの名前が並んだ。

こま回しに熱中したのは学生と中年男性たち。近くに住む会社員井上靖さん(55)は連戦連勝。学生に手ほどきし、「久々に熱くなった。またやろな」。

2010年12月。この庭は雑草に覆われていた。庭を囲む家屋の1棟は空き家だった。まか通の学生を指導する関本徹生教授(58)が「おまえ、ここに住むか?」。3年の桜沢克征さん(22)が「住みます!」と即答した。4畳半でも、約20坪の庭が宝の原石に見えた。

六原地域は住民3人に1人が65歳以上。独居世帯が多く、空き家やコインパーキングが増え、街並みが刻々と変わりつつある。

空き家に学生 町内の一員に

「住んでこそ」の交流生む

まか通は、そんな六原地域で住民が忘れがちな暮らしの中の独自文化や伝承の魅力を掘り起こそうと、8年前からフィールドワークを続けてきた。歴代の学生がほぼ毎月の町内会長会議に顔を出す。地域運動会の障害物競走に使う工作物を手掛け、テント張りなど力仕事も担う。いつしか回覧板に、まか通発行のチラシを入れてもらえるようになった。

「住んでこそ見えるものがある」と考えていた関本教授は「機が熟した」と感じ、市と六原地域が始めた空き家流通促進事業を活用した。「まか通の学生なら」。地域も円満に迎えた。学生は代々住み継ぐ決意を伝えた。

昨年5月。桜沢さんは左京区の下宿先から引っ越した。「もう、あいさつ回り行ったか?」。ご近所さんになった加藤昭代さん(74)が自家製の梅干しを差し入れた。

「にんにく焼いたの食べますか?」と学生。「それ好物や」。孫のような若者との会話に目が潤みそうになった。

雨の日。桜沢さんは不在。外で洗濯物がぬれていた。加藤さんが畳み、軒下に入れた。「向こう三軒両隣。特別なことしてへん」

ある日、桜沢さんたちが庭で焼き肉をしていた。加藤さんが「もう一品どうや?」。手には豆の天ぷら。

昨秋、初イベントを10月に控え、桜沢さんは焦った。庭の草が背丈に迫るほど伸びていた。状況を見かね、隣の町内に住む坂田栄一さん(74)がシャベルやつるはしを貸した。

学生総出で掘り起こし、根ごと草を取る。何とか会場らしくなった。魔よけで屋根に置く「鍾馗さん」の像を粘土で作る催しは、住民や区外からの参加者約30人でにぎわった。

数日後、坂田さんが六原ハウスを訪れた。学生たちが「庭の土の中につぼがあったんですよ。埋蔵金かも」。坂田さんが答える。「この長屋は江戸時代に典型的な共同住宅。昔の住人がともに使った便所つぼが妥当やな」

学生たちは落胆しつつ「何でも知識豊富やな」と感嘆した。

空き家対策で市と地元のつなぎ役を務めた六原自治連合会事務局長の菅谷幸弘さん(59)は「マンションができても、若者の存在感は薄かった。日中から桜沢君たちが行き来し、笑い声が響く。そこには心地いい空気が流れる」と、若い力の好影響を実感する。

東京の古くも新しくもない街で育った。地域の行事に参加した記憶はない。「それまではただ住んでた。今は町内の一員『何と言うか、『町民』になった感じ」。雪が舞う六原ハウスの庭に、桜沢さんが黒板やすのこを運ぶ。「ここでもっと多くの人と会いたい。今でも毎日が不思議なくらい楽し過ぎるけど」(髙元昭典)

六原ハウス　京都市東山区大和大路通松原下ルの京都大和大路郵便局前から細街路を東に入った路地奥。今後の交流イベントの日時は未定だが、「鍾馗さん」像作りの定期開催に加え、新たな催しを発案、実行する。イベントの問い合わせは京都造形芸術大プロジェクトセンター☎075(791)8763。

路地奥の庭で、学生と住民がこま回しに夢中になった。真剣な大人に、おどける子ども。穏やかな時間が流れた(京都市東山区・六原ハウス)

東京都出身の桜沢さんが餅つき初体験できねを振るう。ふらっと立ち寄った外国人が後ろから眺める

女子大生と、孫を連れた近所の女性が餅を丸める。初対面でも会話が弾んだ